東洋大学学術情報リポジトリ　Toyo University Repository for Academic Resources

ソルブの民話（９）

著者	パウル ・ネド（編），大野 寿子（訳）
著者別名	Paul Nedo(edited), Hisako Ono(translated)
雑誌名	国際文化コミュニケーション研究
巻	6
ページ	119-138
発行年	2023-03
URL	http://doi.org/10.34428/00014014

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

翻訳

ソルブの民話（９）[1]

パウル・ネド（編）
大野　寿子（訳）

37. 七人兄弟

昔あるところに七人の兄弟がおり、騎兵になった。ちょうど戦争中だったこともあり、戦場で荒れた生活を送っていた。その荒れた生活ももう嫌になり、逃亡することにした。彼らはその決断を首尾よく実行に移した。遥か何マイルもの道のりを馬に乗って逃げた後、彼らはようやく遠い彼方に古い灰色の城を見つけた。七人はその城へと向かい、到着すると馬から降りた。

彼らは城内へと入った。城の内部の部屋の真ん中に、テーブルが一つあるのを見つけた。その上には七枚の皿がおいてあり、その脇には七本のナイフと七本のフォークがあった。これらは彼らのお気に召した。それから七人は、自分たちの馬を屋敷内へと連れてきて厩へ入れた。そこには七頭の馬のためにオート麦と水がおいてあった。

馬の世話をした後、彼らは再び部屋へと入り、テーブルについて食事を求めた。するとすぐに灰色の小人が一人入ってきた。小人は、最高の食べ物と飲み物を持ってきてこう言った。

「ここにお残りなさい。そうすればあなたたちみんな幸せになるでしょうね」

しかし長男にだけはこう語り続けた。

---

1 テクスト：Paul Nedo (Paweł Nedo): Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956, S. 175-185. パウル・ネド『ソルブの民話―概説と注釈を施した体系的文献一覧』、ドモヴィナ出版社（バウツェン）、1956年、175-185頁に掲載された第37-39番目の話を訳出する。

「一年の間あなたが一人きりでここに残り、たとえどんなことが起ころうと、あなたの兄弟の誰にも何も言わなければ、あなたはとても幸せになれるでしょうね」

兄弟たちはすべての食事を堪能し、ここに留まると決めた。晩になると、彼らは横になり眠りについた。

真夜中頃、長男が目を覚ました。彼のベッドの前に、若く美しい少女が立っていた。少女は長男に約束を守れるかどうか尋ねたが、彼は答えなかった。すると少女は姿を消した。彼には、すべてがとても憂慮すべき事態に思われたので、翌朝兄弟と共に逃げると決めた。夜が明けると、彼らは馬を厩から出し、騎乗して逃げ去った。最初は万事順調に進んだが、ほどなく彼らの周りがひどい荒地となり、それ以上進むことができなくなった。そこで彼らは再び引き返すことにした。

＊　＊　＊

兄弟たちが城へ戻ると、馬を厩へ連れて行き、自分たちの部屋へと入った。しばらくして長男が、厩で馬の世話をしたくなった。彼が厩に入ると、六頭の馬から頭がなくなっていることに気がついた。自分の馬にだけかろうじて頭が残っていた。それから彼が部屋に戻ると、彼の兄弟たち六人は、テーブルの前にかろうじて座ってはいたが、それぞれ自分の頭を皿の脇においていた。彼はもう逃げようとはしなかった。というのも、そうしても無駄だろうと思えたからだ。こうして長男は留まった。

夜中になると、この騎兵のもとに一頭の豚の頭が出現し、ほどなくして消えた。それから長い黒猫が部屋中を歩き回り、最後に、あの若く美しい少女が戻ってきた。少女は彼に、とにかく耐えるようにと言った。あと数夜だけ幽霊を見続ければ、そのようなものはもうやってこないだろうと。しかも、もし長男がその年を通して耐えおおせたら、彼女自身も救済されるというのである。そして彼女は姿を消した。

さて、彼女が言った通りのことが起こった。はじめの数夜こそ多くの幽

霊が出現したが、後になると、騎兵は何も見ることがなくなっていった。一年が過ぎたちょうどその日に、あの若く美しい少女が喜び一杯で城へとやってきて、騎兵にこう言った。

「今私は救われました。でもこうなりますと、できれば私の両親も救いたく存じます。ぜひ馬を引き、私を乗せてここから連れて行ってください。たとえどんなことが起ころうと、どうぞ勇気を失わないでください」

それから彼は、少女と共に馬に乗っていった。彼らがある程度の距離を進むと、一羽のワシが騎兵と少女に向かってまっすぐ飛んできた。ワシが少女をついばもうとくちばしを大きく開いただけで、少女はカモに、騎兵はカエルに変身した。カモはすぐそばの湖へと飛び込み、カエルもまたピョンと飛び込んだ。それから、ワシがカモに襲いかかり絞め殺そうとしたが、カモはそのくちばしでカエルをつかんで一緒に潜り、水の中を泳ぐに泳いで近くの岸へとたどり着いた。ワシは、そこまで彼らを追うことはできなかった。

カモとカエルが向こう岸にたどり着くと、再び変身して人の姿となった。そうして騎兵と少女は、うれしそうに抱き合った。今この時、少女の両親と騎兵の兄弟の救済が成就し、彼女の父と母と彼の兄弟六人が集まってきた。大きな喜びに満ちていた。それから彼らはみな、その最後の時まで幸せに暮らした。

〔出典：『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』（Vkst）、264頁〕[2]

38. 金の家宝[3]

ある父親には二人の息子がおり、金の家宝を持っていた。彼は二人にこ

2 Edmund Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880. エトムント・フェッケンシュテット『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』、グラーツ、1880年。Vkstと略記。

3 ソルブ語タイトル Złote kubło の kubło は、土地、財産、財宝といった意味があり、ドイツ語の Gut にあたる。農村というシチューエーションを鑑みると「金の土地」とも訳せるが、ここでは「物」と解釈し訳出した。

う言った。
「自分の嫁の持ち物から最高に美しい指輪を持ってきた者に、金の家宝を与える！」
　兄は喜んだ。というのも、もう嫁がいたからだ。だが弟は悲しんだ。兄は大喜びで門を飛び出した。弟は泣きながら納屋へと向かった。そこに大きなカエルがノソノソやってきてこう言った。
「お兄さん、なぜそんなに泣いているの？」
「どうして泣かずにいられましょう？」と弟が言った。
「父は金の家宝を持っていて、自分の花嫁の持ち物から最高に美しい指輪を持ってきた者が、その家宝をもらえるのです」
「泣かないで」とカエルが言った。
「私についてきて」

＊　＊　＊

　弟はカエルの後につき従い洞窟の中へとやってきた。そこには部屋が一つあり、カエルは部屋全体に光り輝く指輪を一つ弟に与えた。彼はそれを家に持ち帰った。すると父親がこう言いった。
「長男よ、お前が持っているものを見せなさい！」
兄は錆びた指輪を紙の包みから取り出した。さらに父親はこう言った。
「末っ子よ、お前の番だ！」
するとあの指輪によって部屋全体が照らし出された。ところが父親は、これでは満足するわけではなくこう言った。
「自分の嫁の持ち物から最高に美しい絹の布を持ってきた者に、金の家宝を与える！」
　兄は大喜びで屋敷を飛び出した。弟は泣きながら納屋へと向かった。そこに大きなカエルがまたノソノソやってきてこう言った。
「お兄さん、なぜそんなに泣いているの？」
「どうして泣かずにいられましょう？」と弟が言った。

「父は金の家宝を持っていて、自分の嫁の持ち物から最高に美しい絹の布を持ってきた者が、その家宝をもらえるのです」
「泣かないで」とカエルが言った。
「私についてきて」

＊　＊　＊

弟はカエルの後につき従い洞窟の中へとやってきた。そこには大きな部屋が一つあり、カエルは光沢のある布を一枚弟に与えた。彼はそれを家に持ち帰った。すると父親がこう言った。
「長男よ、お前が持っているものを見せなさい！」
兄は持っているものを見せたが、それは屑布だった。さらに父親はこう言った。
「末っ子よ、お前の番だ！」
すると弟は、照り輝く絹の布を引っ張り出した。ところが父親は、これでも満足することはなかった。そしてこう言った。
「最高に美しい嫁を連れてきた者に、金の家宝を与える！」
兄は喜んだ。だが弟は悲しんだ。兄は大喜びで門を飛び出した。弟は泣きながら納屋へと向かった。そこに大きなカエルがまたノソノソやってきてこう言った。
「お兄さん、なぜそんなに泣いているの？」
「どうして泣かずにいられましょう？」と弟が言った。
「父は金の家宝を持っていて、最高に美しい嫁を連れてきた者が、その家宝をもらえるのです」
「泣かないで」とカエルが言った。
「私についてきて」

＊　＊　＊

弟はカエルの後につき従い洞窟の中へとやってきた。そこには美しい部屋が一つあり、その部屋の中に美しい少女が一人いた。カエルは彼女に服

を着せた。下の方には絹の衣装を、上の方には普通の服を着せたのだ。兄もまた自分の嫁を連れてきたが、上の方には美しい衣装を、下の方には粗末な服を着せていた。すると父親がこう言った。

「長男よ、お前の花嫁と踊りなさい！」

兄がクルクル回ると、彼女から美しい衣装が剥がれ落ちていき、粗末な服だけが残った。さらに父親は弟に言った。

「末っ子よ、踊りなさい！」

弟は踊った。すると粗末な服が剥がれ落ちていき、美しい衣装だけが残った。父親は目を見張ってこう言った。

「お前に金の家宝を与えよう」

兄は弟に対して腹を立てこう言った。

「くじ引きだ」

だが父親はこう言った。

「いや、その必要はない。末っ子に金の家宝をとらせよう」

〔出典：『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』（Łžn）、1861年、43〕[4]

39 a. パルマンとエルスヒェン

昔あるところにパルマンとエルスヒェンという名の兄妹[5]がおり、とても相手を想い合っていた。二人ともとても美しかった。しかし彼らは貧しかったので、兄は妹から遠く離れ、ある領主に御者として仕えた。その地で兄は妹をひどく想い焦がれ、彼女の似顔絵を描かせ、厩の扉に掛けておいた。彼は厩に入る時はいつも喜び、厩を出る時は悲しんだ。このことに

4 Łužičan, časopis za zabawu a powučenje (Der Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1860-81.『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、バウツェン（ブディシン）、1860-81年。Łžnと略記。

5 今回は兄と妹として翻訳を試みたが、どちらが年上なのか、つまり兄妹なのか姉弟なのかは、単語からも物語の流れからも不明である。姉と弟の物語としての再読もお勧めしたい。

気づいた彼の主は、どうしていつも厩に入る時は喜んで、厩から出る時は悲しむのかと尋ねた。御者の兄は、最初は語ろうとはしなかったが、とうとう答えた。
「私が厩に入る時いつも嬉しくなるのは、妹に会えるからです。妹の絵を厩の扉に掛けているのです。私が厩から出る時いつも悲しくなるのは、妹と別れねばならないからです」
　すると領主はこう言った。
「その絵を持ってきて私に見せなさい」
　御者は言う通りにした。領主にはその絵がことのほかお気に召し、妹が本当にこんなに美しいのか御者に尋ねた。御者はこう答えた。
「もう数倍も美しいです！」
そこで領主は御者に、妹を連れてくることができるよう、一台の馬車と二頭の馬を与えた。彼女を自分の妻にしようと思ったのだ。

＊　＊　＊

　パルマンとエルスヒェンは自分たちの（名づけ親の）代母も連れて行くことにした。エルスヒェンはとても上品に身なりを整え、首には透き通った真珠のネックレスをつけていた。しかし彼らは紅海を通らねばならなかった。御者の兄は、妹が海を渡らねばならないことを心配し、馬車の中にいる妹に彼女に向って大声でこう言った。
「妹のエルスヒェン、外を見ないで、落ちてしまうからね！」
妹は、兄の言っていることがわからなかったのでこう尋ねた。
「代母のおばさん、兄のパルマンはなんて言っていたのですか？」
代母は答えた。
「兄さんはね、お前が外を見るべきだと言ったんだよ！」
　エルスヒェンがその通り窓の外を覗き見ると、代母は彼女を海へと突き落とした。妹を乗せていると思っていた御者は、結局老婆を一人連れて、自分の領主の館へと戻ってきた。領主はもう長いこと待ち焦がれていたの

で、御者が到着すると、自ら走って出迎えた。しかし、馬車の中の老婆を見て叫んだ。

「我が御者のような嘘つきは、煙突の中に、裸で逆さ吊りにされるがふさわしかろう！」

それは現実のものとなった。

＊　＊　＊

この日の夜、一羽のカモが御者のところにやってきた。煙突の上で羽ばたきをすると、人の姿になった。見まごうことなかれ、それが彼の妹だったのだ。彼女は兄に白いシャツを着せた。早朝、使用人が彼に食べ物を持っていくと、もともと裸で煙突の中に吊るされていた御者が白いシャツを着ていたことに驚き、それがどこからきたのか御者に尋ねた。御者はこう言った。

「夜、一羽のカモが煙突の上に飛んできて、羽ばたきをすると人の姿になり、シャツを私に着せてくれました。あれは紛れもなく私の妹でした。ここに来る途中、代母によって海に突き落とされたのです」

そこで見張りが数人配された。次の夜、カモが再びやってくるかどうか注意を払っていたところ、見まごうことながれ、カモが十一時に同じようにやってきた。見張りは、彼女を助けることができないかどうか尋ねた。カモは言った。

「はい、助けてください。私の足には大きな鎖がついています。それが壊れたら私は救われます！」

そうして見張りが鎖を切り落とすと、彼女は人の姿となった。彼女を何度見ても見飽きることがなかった領主は、彼女を自分の妻として迎えた。御者の兄も再び仕事を与えられた。彼はもう思い焦がれることはなくなった。

「かのごとき代母はどうなるがふさわしいか？」と領主が言った。

「馬の尻尾に結びつけられ、死ぬまで引きずり回されるべきだと私は思います」

しかしエルスヒェンが代母の命乞いをした。そしてエルスヒェンは改めて結婚し、幸せな人生を送った。

〔出典：クリューガー（Krüger）手書き原稿44頁第２番〕[6]

39 b. 美しい少女

昔あるところに父親と母親がおり、二人には男の子と女の子が一人ずついた。[7] この娘はとても美しかった。彼女が笑うと口からバラの花が咲き、彼女が鼻をかむと鼻から小さな金の魚が飛び出し、彼女が髪を梳かすと頭から金の髪がこぼれ落ち、彼女が手を洗うと金の真珠（しずく）が両手に絡みついた。それから母親が亡くなり、父親が別の女を妻に迎えた。ところがこの継母は女の子を一人連れており、二人（の継子）を激しく攻めたてた。

二人の子供が大きくなると、少年はある領主に奉公した。彼は屋敷から故郷の方を見やるといつも笑い、屋敷に入る通路ではいつも泣いた。領主はこれを見てとても不思議に思い、この若者に尋ねた。

「お前はなぜ屋敷から出る時に笑い、屋敷に入る時に泣くのか？」

彼は言った。

「私には故郷の継母のもとに実の妹が一人おります。彼女はとても美しく、彼女が笑うと口からバラの花が咲き、彼女が鼻をかむと鼻から小さな金の魚が飛び出し、彼女が髪を梳かすと頭から金の髪がこぼれ落ち、彼女が手を洗うと金の真珠（しずく）が両手に絡みつくのです」

すると領主は馬に馬具をつけさせ、妹を連れてくるよう彼に言った。そして少年は馬車を走らせ家に着いた。ところが継母は、自分の娘も領主のもとへといっしょに行かせたがったため、みんなで馬車に乗り出発した。

---

6 H. Krüger: Sorbische Rätsel, Sprichwörter und Märchen. Handschrift mit Abschriften Krügers aus der Leipziger sorbischen Studentenzeitung. H・クリューガー「ソルブの謎、諺とメルヒェン」、ライプツィヒ・ソルブ学生新聞よりクリューガーの手書き原稿（写し付き）。

7 注５と同様、どちらが年上なのか判別不能である。今回は兄妹として訳出するが、姉弟としての再読もお勧めしたい。

＊　＊　＊

途中にとても美しい川があった。少年は妹にこう言った。

「外を見ないで。風がおまえの小さな頬を切り裂いてしまうからね」

しかし継母はこう言った。

「外をごらん。さあごらん。ここはなんて綺麗な水が流れているだろうね！」

妹は外を見た。そして継母はすぐさま彼女を川へと突き落とした。すると少女はカモの姿となり飛び去った。少年はとても悲しみ、馬車を走らせ屋敷に到着した。

さて領主は継母の娘に笑うように言った。すると、彼女の黄色い歯がむき出しになった。鼻をかむように言った。すると、鼻からドロッとした鼻水が垂れ落ちた。髪を梳かすように言った。すると、頭からシラミがこぼれ落ちた。手を洗うように言った。すると、両手にとんでもない垢がこびりついた。

領主は大変怒り、このような（嘘つきの）少年をどうするべきかと継母に尋ねた。継母はこう言った。

「彼の黒髪を煙突の中の柱にでも括りつけ、お吊るしになるといいでしょう」

そうして領主は少年を煙突の中に吊るした。

＊　＊　＊

最初の夜も近くなると、カモの姿をした妹が、少年のもとに飛んできてこう言った。

「クワックワッ、大好きなお兄さん、もう二晩だけやってきます。そうしたら二度とまいりません」

そして彼女は飛び去った。二晩目も、カモは飛んできてこう言った。

「クワックワッ、大好きなお兄さん、もう一晩だけやってきます。そうしたら二度とまいりません」

実は領主もこれを聞いていたため、三晩目は領主も彼女を待ち受けた。

カモは再びやってきて嘆きながらこう言った。

「クワックワッ、大好きなお兄さん、もう二度とお会いすることはできません」

カモがそう言うと、領主はその翼をつかみ、解決の道はもはやまったくないのかと尋ねた。彼女はこう言った。

「私の腰には鎖が三重に巻いてあります。それをあなたさまの戦用の剣で一撃で叩き壊してくだされば、私は人の姿となるでしょう」

領主はその鎖を叩き壊した。すると彼の前に、たいそう美しい少女が一人立っていた。

領主は少女に笑うように言った。すると、彼女の口からバラの花が咲いた。鼻をかむように言った。すると、鼻から小さな金の魚が飛び出した。髪を梳かすように言った。すると、頭から金の髪がこぼれ落ちた。手を洗うように言った。すると、金の真珠（しずく）が両手に絡みついた。

領主は大変喜んだ。そして右手で少女の手を取り、左手で少年の手を取って、三人そろって部屋へと入った。さて、領主は継母に、自分はどうすべきだろうと尋ねた。継母は、問題はその（継）娘にあると意見を述べた。彼女を老いぼれ馬の尻尾にでも括りつけ、服や肉がボロボロになって飛び散るまで、その馬を走らせればいいと。すると領主がこう言った。

「お前が自分でそのような死を選んだのだ。甘んじてそれを受けるがよい」

この通りのことが起こった。そして美しい少女は領主の妻となり、少年はその従者となった。

〔出典：『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』（Łžn）、1862年、5〕[8]

8 注4参照のこと。

【パウル・ネドによる注釈】[9]

37. 七人兄弟

このメルヒェンはエトムント・フェッケンシュテット（Edmund Veckenstedt）がザンドウ（Sandow）[10]から入手した。ソルブのメルヒェン文学の中には、同様のメルヒェン資料が見当たらない。この事実からだけでも、当該テクストの信憑性に相当な疑問が生じる。さらに内容面に関しても、さまざまな関係性が不明確である。

ここで明らかなのは、さまざまなモティーフ（Motiv）が一部恣意的に組み合わされて、新しいユニット（Einheit）が形成されているということである。たとえば、救済された乙女を伴っての乗馬は、魔術的逃避（die magische Flucht）を想起させるが、ワシというのは珍しい。苦悶の夜についても不明瞭にしか記されておらず、AT 400（いなくなった妻を探し求める夫）[11]を指摘するのみである。頭なしの兄弟と馬というのもまた、説明がなされていない異常な出来事である。

シュレージエンからは、ヴィル=エーリヒ・ポイケルト（Will-Erich Peuckert）[12]がよく似たモティーフを提供しているが、本テクストとの直接的関係性の確証には至らなかった。ポイケルト『メルヒェン集』138頁75番（救済された乙女）、141頁76番（魔法にかけられた城）、143頁77番（狩人物語）を参照のこと。

---

9 テクスト：パウル・ネド『ソルブの民話―概説と注釈を施した体系的文献一覧』、ドモヴィナ出版社（バウツェン）、1956年、385-388頁。

10 現在はコトブス（Cottbus）を構成する19地区の中の一つ。

11 Antti Aarne / Stith Thompson: The Types of the Folktale (Folklore Fellows' Communications 74). Helsinki 1928. アンティ・アールネ／スティス・トンプソン『民話の話型（タイプ）』（FFC74号）、ヘルシンキ、1928年。ATと略記し、その後に通し番号を記す。

12 Will-Erich Peuckert: Schlesiens deutsche Märchen. In: Schlesisches Volkstum. Bd. 4. Breslau 1932. ヴィル＝エーリヒ・ポイケルト『シュレージエン地方のドイツ・メルヒェン集』（『シュレージエンの民俗』第4巻）、ブレスラウ、1932年。

この話型（タイプ）のドイツのメルヒェンについては、「民俗学協会雑誌」（Zeitschrift des Vereins für Volkskunde）第VI巻164頁（Köhler）[13]を参照のこと。

チェコのメルヒェンからは、ヴェツラフ・ティレ（Václav Tille）がFFC 34[14]の137-140頁にこの話型（タイプ）に類似の話を挙げているが、フェッケンシュテット版（バージョン）（Fassung）を明確にするための手がかりにはやはり乏しい。

38. 金の家宝

このたいへん美しいメルヒェンは、H・W（おそらくはハンドリィ・ヴルシンスキ）[15]によって「民より」記録されたものである。雑誌『ソルブの花』（Kwětki）[16]の1900年から1901年に再び登場するが、かなり冗漫で不明瞭である。この版（バージョン）が、シェウチック（Šewčik）『メルヒェンと説話―「セルボウカ」記念号』（1899年）[17]の 8 頁につながっている。本書の我々の版（バージョン）は、シェウチックのスロヴァキア読本（Slovenská čítanka）の83頁に継承者より収録されてもいる。このチェコ語訳をボルテ/ポリーフカが、『グ

13 Vgl. Johannes Bolte (herg.): Zu den von Laura Gonzenbach gesammelten sicilianischen Märchen. Aus dem Nachlasse R. Köhlers. In: Zeitschrift des Vereins für Volkskunde. Bd. 6. Berlin 1896, S.161-175.ヨハネス・ボルテ編「ラウラ・ゴンツェンバッハ収集によるシシリアのメルヒェンによせて―R・ケーラー遺稿より」、「民俗学協会雑誌」第 6 号、ベルリン、1896年、161-175頁参照。

14 Václav Tille: Verzeichnis der böhmischen Märchen. I (Folklore Fellows' Communications 34). Porvoo 1921. ヴェツラフ・ティレ『ベーメンのメルヒェン目録 I 』（FFC34号）、ポルヴ、1921年。

15 ハンドリィ・ヴルシンスキ（Handrij Wólšinski）はハンドリィ・ドゥッチュマン（Handrij Dučman）のペンネームであり、そのドイツ名はアンドレアス・ドイチュマン（Andreas Deutschmann）である。

16 Kwětki Serbowki (Blumen der Serbowka). Hdschr. Zeitschrift des sorbischen Studentenvereins Serbowka in Prag. 1846-1922.『ソルブの花』、プラハのソルブ人学生組合「セルボウカ」の手書雑誌、1846-1922年。

17 Jakub Šewčik: Bajki a basnički. Jubilejne spisy Serbowki. III. zešiwk (Märchen und Erzählungen. Jubiläumsschriften der Serbowka. Bd. III.). Budyšin-Bautzen 1899. ヤークプ・シェウチック『メルヒェンと説話―「セルボウカ」記念号』第 3 巻、バウツェン（ブディシン）、1899年。Złote kubłoというタイトルで、実際に 8 -12頁に収録されている。https://digital.slub-dresden.de/werkansicht/dlf/180074/16　（2022年12月16日参照）

リム兄弟《子供と家庭のメルヒェン集》注釈書』[18]第Ⅱ巻35頁のKHM[19]63（三枚の羽）の注釈にも引用している。ただしそれでもソルブ語の原点は不明のままだった。このメルヒェン話型（タイプ）については、アルブレヒト・ヴェセルスキー（Albert Wesselski）『グリム以前のドイツのメルヒェン』[20]の3番「カエル」（Padde）を参照のこと。

このメルヒェン話型（タイプ）は広く流布している。我々の近隣地域のも十分にテクスト化されている。シュレージエン版（バージョン）では、ポイケルト『メルヒェン集』の145頁79番（魔法の解けたヒキガエル）（シャツを縫う→ケーキを焼く→花嫁→肌を焼く）。ウッカーマルクではビュッシング（Büsching）の『民間伝説、メルヒェンそして聖人伝』[21]の286頁（カエルについて）（亜麻布→イヌ→花嫁）。クーン（Kuhn）とシュヴァルツ（Schwartz）[22]の331頁7番（白ネコ）（小舟→亜麻布→王女）。ポンメルン版（バージョン）は「ポンメルン民俗学雑誌」（Blätter für pommersche Volkskunde）第6号（1897年12月）33頁（おバカなハンス）（お金→鎖→妻）。

ティレ『チェコのメルヒェン集』[23]第II巻第1部の184頁、およびFFC34の

---

18 Johannes Bolte/ Georg Polívka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig 1913-32.ヨハネス・ボルテ/ゲオルグ・ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のメルヒェン集》注釈書』、全5巻、ライプツィヒ、1913-32年刊行。以下、ボルテ/ポリーフカ『注釈書』あるいはBPと略記。

19 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen.　グリム兄弟『子供と家庭のメルヒェン集』の略称。第1巻初版刊行1812年、第2巻初版刊行1815年。その後に続く番号は、第7版決定版（1857年）の通し番号。

20 Albert Wesselski: Deutsche Märchen vor Grimm. Wien 1942. アルブレヒト・ヴェセルスキー『グリム以前のドイツのメルヒェン』、ヴィーン、1942年。

21 Johann Gustav Büsching: Volks-Sagen, Märchen und Legenden. Leipzig 1812. ヨハン・グスタフ・ビュッシング『民間伝説、メルヒェンそして聖人伝』、ライプツィヒ、1812年。

22 Adalbert Kuhn und Wilhelm Schwartz: Norddeutsche Sagen, Märchen und Gebräuche. Leipzig 1848. アダルベルト・クーン/ヴィルヘルム・シュヴァルツ『北ドイツの伝説、メルヒェンそして慣習』、ライプツィヒ、1848年。

23 Václav Tille: Soupis českých pohádek (Sammlung der tschechischen Märchen); I. Rozpravy České Akademie Věd a Umĕmi. Tř. III, č. 66. Praha 1929; II/1. Rozpravy České Akademie Věd a Umĕmi. Tř. III, č. 72. Praha 1934; II/2. Rozpravy České Akademie Věd a Umĕmi. Tř. III, č. 74. Praha 1937. ヴァツラフ・ティレ『チェコのメルヒェン集』第Ⅰ巻、プラハ、1929年。第Ⅱ巻第1部、プラハ、1934年。第Ⅱ巻第2部、プラハ、1937年。注14参照。

238頁に見られる、これと同様ないしは類似のモティーフ構成を有するチェコのいくつかのメルヒェンでは、魔法をかけられた王女たちが登場し、ネコ、カエル、ガチョウそして黒い女に姿を変える。一つの版（187頁）だけが、ソルブ類話の農民環境に近しいが、この版でも最後にはカエルが、きらびやかな側近を配する王女になる。ほとんどの場合、贈り物には長めの奉公が結びつけられている（KHM 106「貧乏な粉ひき少年と子ネコ」参照）。チェコの版で認められうることが、ポリーフカ（Polívka）『スロヴァキアの民話集』[24]第Ⅱ巻185頁のスロヴァキア版にも当てはまる。ポーランドのメルヒェン――クジジャノフスキー（Krzyżanowski）『体系的に配置されたポーランド民話』[25]第Ⅱ巻64頁――では、自分の放った矢が落ちた場所で、本テクストと同様一匹のカエルの見つけるのは、王子であるのが通例である。そのカエルは三度の苦悶の夜を経ることで、あるいは皮を焼かれることによって救済される。詳細に関しては、目録からはわからない。

要約すれば、この話型のメルヒェンは、我々の地域ではほとんど同じと言うことができる。ただし、ソルブの類話に特徴的なのは、農村環境へと場を徹底して移動させたことである。目新しいのは、ラストのダンスのモティーフだ。「金の家宝/土地」（goldenes Gut）という表現については、これまで見てきた類話のいずれにも見当たらなかったため、明確にすることはできなかった。

我々ソルブ語の類話を貴重ならしめるのは、その言語様式にある。

---

24 Jiří Polívka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv. Martin 1923-1931.ユィジ・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5巻、マルティン、1923-1931年。

25 Julian Krzyżanowski: Polska bajka ludowa w układzie systematycznym (Das polnische Volksmärchen in systematischer Anordnung).1.Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen) Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das Zaubermärchen). Warszawa 1947. ユリアン・クジジャノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』、第Ⅰ巻「動物メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。第Ⅱ巻「魔法メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。

その最たるは、言語形式の極端なまでの簡潔さ、卓越した表現の集中性、古い言語形式の使用の三つである。ここでも再び「und」を含む連続（シークエンス）が出現する。構成の厳格な遵守、さらに芸術的な表現手段とも言える同じ言葉の繰り返しが、素晴らしい表現力と強力な効果をこの版（バージョン）に与えている。

魔法によるカエルやヒキガエルへの変身のモティーフは、ラベナウ（Rabenau）[26]の101頁――フェッケンシュテット251頁（魔法にかけられた王女）参照のこと。とはいえこちらは、メルヒェンではなく伝説である。これに関する参考資料は、ボルテ/ポリーフカ『グリム注釈書』第Ⅰ巻、366頁にある。同様に伝説形式が問題となるのが、ラベナウの127頁――フェッケンシュテットの255頁（感謝するヒキガエル）である。ラウジッツの民間伝承に登場するヒキガエルについては、シューレンブルク（Schulenburg）『民間伝説と風習』[27]の299頁を参照のこと。

39. すり替えられた花嫁

このすり替えられた花嫁のメルヒェンは、ソルブの伝承では二つの版（バージョン）で書き留められた。

39 a. パルマンとエルスヒェン

1827年にライプツィヒでハンドリィ・ザイラー（Handrij Zejler）[28]が、本

26 Alexander Rabenau: Originalmärchen der Wenden. In: Engelhardt. Kühn: Der Spreewald und seine Bewohner. Cottbus 1889. アレクサンダー・ラベナウ「ヴェント人のオリジナル・メルヒェン」、エンゲルハルト・キューン『シュプレーの森とそこに住む人たち』、コトブス、1889年。

27 Wilibald von Schulenburg: Wendische Volkssagen und Gebräuche aus dem Spreewald. Leipzig 1880. ヴィリバルト・フォン・シューレンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』、ライプツィヒ、1880年。SchVsと略記。

28 ハンドリィ・ザイラー（Handrij Zejler）のドイツ名は、アンドレアス・ザイラー（Andreas Seiler）となる。

書に報告された類話（バリエーション）を、手書きの『ソルブ新聞』（Serbska Nowina）[29]に投稿している。『H・ザイラーとその時代』（H. Zejler a jeho doba）の271頁、オタ・ヴィチャス（O. Wićaz-Lehmann）[30]を参照のこと。我々は本書では、クリューガー[31]の写しからのテクスト提供を行っている。その写しが、言語的にいささか洗練されたかたちで、『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』（Łžn）[32]1870年の140頁に記されている。

39 b. 美しい少女

a版（バージョン）からは明らかに独立させたかたちで、ミヒャウ・ルーラ（Michał Róla）が第二の版（バージョン）を出版した。この版（バージョン）をナウカ（Nawka）が、『伝説とメルヒェンと物語』（1914年）[33]の35頁23番に使っており、我々の第一版（バージョン）（a）とは大幅に異なるものである。ナウカ版（バージョン）（b）だけは、ボルテ/ポリーフカ『グリム注釈書』第Ⅲ巻、91頁に記載されている。

それからフィリップ・レザック（Filip Rězak）がさらなる版（バージョン）「美しい妹について」（Wo krasnej sotřičcy）を、『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』（Łža）[34]の1901年34頁に発表したが、これは明らかにa版（バージョン）の単なる採録であった。

---

29 Serbska Nowina (Sorbische Zeitung). Handschriftlich. Leipzig 1826-1886.『ソルブ新聞』（手書）、ライプツィヒ、1826-86年。Serbske Nowiny (Sorbische Zeitung). Budyšin- Bautzen 1854-1937.『ソルブ新聞』、バウツェン（ブディシン）、1854-1937年。SNと略記。

30 オタ・ヴィチャスOta Wićaz のドイツ名は、オットー・レーマン（Otto Lehmann）となる。

31 注 6 参照のこと。

32 注 4 参照のこと。

33 Michał Nawka: Baje, baiki a basnički. Serbske narodne. 1. zešwk (Sagen, Märchen und Erzählungen. Sorbisches Volksgut. 1. Heft). Budyšin-Bautzen 1914. ミヒャウ・ナウカ『伝説とメルヒェンと物語―ソルブ民族の宝』第 1 号、バウツェン（ブディシン）、1914年。

34 Łužiča, časopis za zabawu a powučenje (Die Lausitz. Monatsschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1882-1937.『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、バウツェン（ブディシン）、1882-1937年。Łžaと略記。注 4 の『ラウジッツ人』発刊は1881年まで。

このメルヒェン話型（タイプ）は、KHM 135（白い花嫁と黒の花嫁）と密接な類縁関係にある。KHM135をグリム兄弟が入手したのは、メクレンブルク地方からとパーダーボルンの話からであった。ドイツのメルヒェンでは、少女は自身の美しさを神のお導きで獲得する。それに対して、たとえばポーランドのいくつかの類話（バリエーション）は、導入部にAT 480（泉のそばの糸紡ぎ女たち―親切な少女と不親切な少女）のモティーフを有している。クジジャノフスキーはそれゆえ、ポーランドの複数の類話（バリエーション）をKHM13（森の中の三人の小人）と関連づける。クジジャノフスキー『ポーランドの民話』第Ⅱ巻、64頁を参照のこと。ソルブのこの双方の類話（バリエーション）では、妹の美しさの理由づけがなされてはいない。ただしb版（バージョン）では、その美しさの描写はされている（バラは口から、金の小魚は鼻から、金の髪は頭から、金の真珠（しずく）は両手から）。このモティーフは、ポーランドの類話（バリエーション）にもスロヴァキアの類話（バリエーション）にも登場する。

ドイツのメルヒェンと我々ソルブのb版（バージョン）には、継母のモティーフがある。それに対してa版（バージョン）では、少女には両親がおらず、（名づけ親の）代母につき添われている。ソルブのしきたりではこの代母が、結婚式の際に母親の役を担う（słónka）[35]。レザック版（バージョン）では、領主の妻が「年老いた産婆」（alte baba）[36]をいっしょに行かせるが、その産婆が御者を欺く。兄（ないしは弟）のパルマンという名前は、ソルブ語の言語使用圏内ではほとんどお目にかからない。他のどの類話（バリエーション）においても、この名前の裏づけはできなかった。

この話型（タイプ）としての類話（バリエーション）はごくわずかである。近隣のシュレージエンからは、ポイケルトが『シュレージエンのメルヒェン』の148頁80番で、「本

35 słónka は、ソルブ語で「塩の壺」（Salznapf）の他に「新婦の介添え人」（Brautführerin）という意味を持つ女性名詞。

36 babaはソルブ語で「産婆」（Hebamme）のこと。

37 Theodor Preuss: Tiersagen, Märchen und Legenden in Westpreussen gesammelt und erzählt. Danzig 1912. テオドア・プロイス『西プロイセンで語られ収集された動物伝説、メルヒェンそして聖人伝』、ダンツィヒ、1912年。

物の花嫁と偽の花嫁」を掲載している。この話はモラビア由来であり、チェコの版（バージョン）をかなり連想させるものでもある。最終的にこのメルヒェンは、プロイス『西プロイセンの動物伝説、メルヒェンそして聖人伝』[37]の25番と、ヴィッサー（Wisser）『低地ドイツの民話』[38]の72頁に収録されている。

チェコのメルヒェンでは、直接の類話（バリエーション）を発見することはできなかった。確かにティレ『チェコのメルヒェン集』第Ⅱ巻第1部の222頁掲載のメルヒェンが、モティーフ上の共鳴を示しているが、直接的な類話（バリエーション）とはもはや見なし得ない。ボルテ/ポリーフカ『グリム注釈書』第Ⅲ巻、91頁も参照のこと。

それに対して、ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』第Ⅲ巻の219頁掲載のメルヒェンの中には、我々ソルブの類話（バリエーション）にとても近い版（バージョン）がある（金の髪の女について〔O panički so zlaté vlasámi〕）。この話では王子が、美しい妹を迎えに行く兄[39]に、年老いたユィジババ（魔女）（Ježibaba）[40]とその娘とをいっしょに連れて行かせることになる。ユィジババ（魔女）は美しい妹から服をはぎ取り、手足を切り落として海に投げ込む。少女は魚に姿を変える。農夫の妻[41]が、ユィジババ（魔女）から彼女の手足を奪還する。それから妹は、捕えられた兄を救い出す。ポーランドの類話（バリエーション）については――クジジャノフスキーが『ポーランド民話』に11の版（バージョン）を挙げている――個々の版（バージョン）が入手可能ではなかったため、個別の様式に関して検証できなかった。

メルヒェンの内容と形式およびその他諸々の状況が物語っているのは、非常に古いメルヒェンが原初的な姿で、本書に保存されたということである。

---

38 Wilhelm Wisser: Plattdeutsche Volksmärchen. Ausgabe für Erwachsene. Jena 1914. ヴィルヘルム・ヴィッサー『低地ドイツの民話―大人のための版』、イェーナ、1914年。

39 注5と同様、兄妹と姉弟の両方の可能性がある。

40 Ježibabaはチェコ語で「魔女」、それも「年老いた魔女」ないしは「カサカサの魔女」（Knusperhexe）という意味。

41 ここには、「この農夫の妻はガチョウを光り輝く金に変えた」とも読み取れる文章があるのだが、印刷が不明瞭なため今回は割愛した。要再検証。

【付記】

当該書の翻訳に関しては、ソルブ協会（バウツェン所在）のアネット・ブレザン氏を介し、ディートリヒ・ショルツェ氏より、1998年 6 月 8 日付で許可されていることを付言しておく。